

2016. 6. 8 (水)

世界に出会う，自分に出会う

大岡 栄美

はじめに

社会学部の大岡栄美と申します。個人的なことですけれども、2014年の夏休みから産前産後休業に入り、約1年の育児休業をいただいております。昨年の秋学期に復帰しましたが、チャペルアワーでこのような形でお話しするのは久しぶりの機会になりますので、この空間に少し緊張しています。

今週のテーマは「世界と出会う」です。1997年から2002年まで5年間ほど、私はカナダのトロントで暮らしていました。「世界と出会う」というとすごく大きいテーマですけれども、今日はその頃の経験をもとに、私なりのメッセージを皆さんにお話ししたいと思います。

自分の中の境界線に出会う

私は留学生としてカナダで暮らしていました。カナダで暮らし始めてすぐ驚いたことの1つが頻繁に道を聞かれることでした。今は皆さんの中でもカナダは多人種・多民族の国、というイメージが強いかもしれませんが、

しかしその頃のカナダというと、自分自身まだまだ「カナダイコール白人の国」というイメージが強かったです。そのため、留学生

として、外国人として暮らしている自分が道を聞かれることが非常に想定外でした。

実は私が留学していたトロントは、カナダ第1の移民受け入れ都市で、その当時も今も人口の約5割が外国生まれです。つまり、カナダやトロントで生まれていない人でまちの約半数が構成されています。そういう意味では、1日でも滞在日数が上だったらトロントにおける先輩になります。肌の色だったり、髪の色だったり、人種や民族の違いで、この人はよそ者、この人は外国人だから道を聞いても分からないと想定する感覚が、どうやらトロントの人にはあまりなかったのです。

例えば、皆さんは関西出身の人がほとんどだとして、東京に行って道が分からないときに、あえてアジア系に見えない人に声を掛けて道を教えてもらおうと思わないのでしょうか。そこが実は普段は意識していない、誰を自分の社会においての内、仲間だと考えていて、誰を外、つまり「よそ者」と考えているか、この境界線をあぶりだすところだと思います。

私は外国人としてカナダで暮らしている感覚でしたので、まさか逆に自分がよそ者と思われずに、道を聞かれるとは想定していませんでした。外に出たことにより、自分の中の

境界線や内と外の意識をあぶりだされる経験をして、非常に面白く感じたことを覚えていきます。

マイナス経験に出会う

先ほどのエピソードにあるように、カナダは人種や民族、言語や宗教の違いで人を排除するのではなく、人を受け入れていく社会であり、法律や制度、社会的な意識が進んでいる国です。関西学院はカナダとのつながりも深いので、2年生のときにカナダへの中期留学を計画している皆さんもいらっしゃるのではないかと思います。ただ、海外に暮らすことはいいことばかりではなく、マイナス経験もその中に含まれます。私も一度だけですが、カナダの自分の住んでいた家の近所で、「自分の国に帰れ」と罵声を浴びせられる怖い経験をしたことがありました。

非常に怖かったですし、震えながら家に帰りました。しかし能天気かもしれません、このような経験も外国にいないとできないことですから、今振り返ってみれば、貴重な経験をしたと思える部分もあります。

この経験を通し考えさせられたのは、日本にいたときにいかに自分は恵まれていたのかということです。皆さんもそうだと思いますが、日本ではほとんどの方が日本語で幼いころから育ってきていますので、自分の言語で思う存分、自分の権利や意見を主張することができます。また、自分が何か理不尽な扱いを受けたときに、「自分が日本人だから」、「自分がアジア系だから」、そのような扱いを受けているかもしれないと日本にいるときには考えずに生きてこられたということにも、気づきました。それは日本において自分がマ

イノリティではなかったからです。

カナダでの経験を通し、自分の人種や言語、肌の色が原因で、理不尽な扱いを受けているのかもしれないと考えずに暮らしていくことができることは、それ自体が特権であり、非常に恵まれているという感覚を持つことができるようになりました。このような経験がないと、自分の人種や民族、あるいは、宗教が中心になっていない社会では、もしかしたら、自分ではどうしようもないことでハラメントを受け、生きづらさを感じている人がいることに、想像力を巡らせることが難しいです。

これは言葉で言うと、「人権感覚」にあたります。しかし、この言葉を頭ではわかっていても、本当の意味でなぜ人権感覚を持って、社会の中で弱い立場に置かれている人の権利に寄り添わなければいけないのかを理解するのはとても困難です。自分をいったん安全圏から外に出す。そんな挑戦も自分の感覚を外に広げる意味で重要ではないかと考えます。

出合いを重ねる

ただ、同じくお伝えしたいのは、カナダで私に「私がアジア系であること」による理不尽な出来事が起きたときに、話を聞いて、それはおかしいと一緒に憤ってくれる、別のカナダの友人たちがいたことです。留学し、現地で多様な人との出合いを重ねることにより、たった一度の個人的な経験から「カナダ人は・・・」と全体に一般化することの不適切さを学ぶことができます。海外でのさまざまな経験は皆さんの中の先入観やイメージを変化させ、皆さんが視野を広げることに

必ずつながると思います。

大学生活が始まって2カ月と少しが過ぎました。海外旅行の計画や海外ボランティアへの参加を考えている人もいます。ぜひチャレンジしてほしいと思います。

最近は留学生も増えています。日本で暮らしている在住外国人の方も増えています。学生の皆さんの中にも、さまざまなルーツやバックグラウンドを持つひとがいて、クラスメイトとしての出会いもあるでしょう。

その意味では、日本にいても世界と出会うことは可能であると言う人もいます。しかし私も言ってあげたいと思います。しかし私の紹介した2つのエピソードからも分かるとおり、日本の空気や湿度、システムからいったん離れて、海外に出たからこそ理解できる感覚や考え方、出会える人や経験があることもまた事実です。

個人的には旅行にとどまらず、できれば1つの所に2週間は暮らすという経験を通じて、いろいろな世界との出会いを経験してほしいです。世界と出会う、というと、外に向かって出会いを求めていくことのみを考えがいきがちです。しかし本当に大切なのは、外との交流や新たな出会いを通じて、自分の中に知らない間に身につけていた感覚や偏見、いつの間にかとらわれていたものの見方、内なる感覚に会い直し、向き合うこともできません。こうした外向きと内向き両方のベクトルでの出会いを重ね、自分の世界を広げていく経験を大学生活のうちに積み重ねていってください。

短くなりますけれども、こちらを今日の私のチャペルのメッセージにしたいと思います。ご清聴、ありがとうございました。

(社会学部准教授)